

知求会ニュース

2021年12月

第80号

◎訃報

岡田三郎（国際学部名誉教授・第四代国際学研究科長）先生が本年8月30日に享年75歳で逝去されました。ここに謹んでお悔やみ申し上げます。

岡本義輝（博士（国際学）・国際学研究科博士前期課程第6期生・博士後期課程第1期生）さんが本年10月26日に享年78歳で逝去されました。ここに謹んでお悔やみ申し上げます。

◎ 日本政府より瑞宝・中綬章 叙勲綬章、おめでとうございます！

鯨井佑士（国際学部名誉教授・初代国際学研究科長・元放送大学栃木学習センター長）先生が本年文化の日に瑞宝・中綬章を叙勲綬章されました。当会を代表して、お祝いを申し上げます。

◎ 令和3年度外務大臣表彰を受賞、おめでとうございます！

橋本孝（国際学部名誉教授・とちぎ日独協会会長）先生が、本年8月に令和3年度外務大臣表彰を授与されました。日本とドイツの相互理解および青少年の促進に尽力された功績によるものです。当会を代表して、お祝いを申し上げます。

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞（令和3年11月10日）9面に、《衆院選 下野新聞 votematch Smatch（すまっち） 延べ1980人利用》コーナーで「結果の分析とポートマッチの総括 暮らし関連政策に関心」と題して、「政府姿勢と民意距離も」の内容で、**中村祐司**（地域デザイン科学部教授）先生の記事が掲載されました。
2. 日本経済新聞（2021年11月22日38面に、《風紋》コーナーで「夜間中学 民間が運営」「一陽を照らす市井の志」の内容で**田巻松雄**（国際学部教授）先生らの記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. UUnow 第53号（令和3年10月20日）2面に、《コロナ禍で宇大生は今！》コーナーで「留学途中で帰国するも前向きに」の題で**荒井寿美**さん（国際学部国際学科4年）の記事が掲載されました。

2. UUnow 第 53 号 (令和 3 年 10 月 20 日) 2 面に、《Welcome to 授業》コーナーで「国際学部 欧米文化社会研究 A (フランス文化論演習)」の題で**榎野佳奈子**先生・**三島華笑**さん・**伊藤結希乃**さん・**久保田愛菜**さん(国際学部国際学科 3 年)らの記事が掲載されました。
3. 下野新聞 (令和 3 年 12 月 5 日) 20 面に、《5 色のレポート 市内大学リレーコラム》コーナーの中で「宇都宮大国際学部」の題にて、「海外でも司法学び成長」の内容で**榊原彩加** (さかきばら・あやか) さん(国際学部国際学科 4 年)のコラムが掲載されました。

◎新刊案内

1. **石澤良昭**先生 (元上智大学学長・元国際学研究科非常勤講師) が、本年 10 月 25 日に NHKBOOKS1271 「アンコール王朝興亡史」を NHK 出版から刊行されました。

特別寄稿

この度、同窓生の岡本義輝さんが逝去されました。岡本さんを良く知るお二人から追悼文を寄稿していただきました。

「思い、忘れ得ずにより」

渥美 好彦

岡本義輝さん。元シャープマレーシア R&D 社長。2003 年 7 月、マレーシアより帰国・定年退職。04 年 4 月、宇都宮大学大学院国際学研究科国際社会研究専攻入学。「マレーシアの AV 技術開発の拡大発展を目指して一日系企業とマレーシア政府への提言」をテーマに、ゼミの資料作成、講義のレポート、修士論文作成の準備、3 ヶ月に一度のマレーシア訪問など、現役時代よりずっと忙しい毎日を送る…… (岡本さん Web サイト「Welcome to Okamoto's Webpage」より)。

私が岡本さんとはじめて会ったのはマレーシアから帰国し、その退職後の一時期、上記ホームページ開設のためパソコン技術習得に躍起となっている頃でしょうか。ある PC 講習会での私の講座に岡本さんは生徒のひとりとして参加されていました。

内容の詳細はもう思い出せませんが、のっけから異色の質問を関西訛りで他の生徒さんなどお構いなしに繰り広げる岡本さん。私の印象は十歳余りも年上の「へんなおっちゃんだなぁ」でした。

それでも参考図書で紹介に ISBN コードを板書すると、「それや。それを教えてくれると助かります」とメモするさすがの国際派ぶり。ただ者ではないの印象を周囲にまで与えたことをいまでもはっきりと覚えています。

以来、あの人懐こい笑顔 (というよりそれはほとんど破顔で、まちががなく「人たらし」の笑顔) に釣り込まれ、誘われるまま宇都宮大学の公開講座からお仲間との飲み会、屋台

横丁ではしご酒、動かないとの依頼を受けてのお宅にお邪魔しての PC 調整(メールボックスがオーバーフローしてました)、こちらは頼みもしないのに、私の所属する会社に押しかけてのマレーシア R&D 社長時代の暮らしぶり DVD 鑑賞会など、奔放な岡本さんワールドをほんとにさまざま繰り広げていただきました。

岡本さんのライフワーク、そのひとつは日本の製造業への深い思い入れに裏打ちされた辛辣な提言でしょう。その精力的な労作は限りなく、たとえば毎週末の「金曜便り」。アジア諸国に事業展開する日本企業を支援する情報媒体「ASIAINFONET」にシリーズ連載された『優秀な R&D 技術者を採用するには』を 400 回にもわたり私たちに配信されていました。そのタイトルには副題として、「～日系企業の商品開発部門に優秀なローカル技術者が少ない原因を元メーカー駐在員の研究者が徹底分析～」と付されています。岡本さんの Web サイトにあるとおり、3 ヶ月に一度マレーシアを訪れ、これまた精力的にさまざまな企業のトップ、採用担当者、人材、現地での新入社員にまでインタビューを繰り返し、それを論文としてもまとめていく……「ローカライズ」の重要性、欧米諸国と日本でのそのとらえ方の違いなど、門外漢の私にとっても多くのことを学ばせていただきました。

岡本さんの周囲を巻き込む「人たらし」……もちろんそれはよい意味で、巻き込まれた人たちを含めてその世界が広がってゆくことをさせています。岡本さんに惹かれ、巻き込まれ(?)した多士済々の、主に宇大公開講座つながりの有志で、「勉強会」が月に一度、駅前の珈琲店で開催されていました。その時々のお題は、これまた岡本さんのムチャぶりです。「〇〇さん、次、これ、やったらどうですか？」慌ててネットや図書館で資料を探し回り、岡本さんの意図するところをさぐる。ああ、なるほどね、と納得。その勉強会での発表レジュメ。「うん、それや。そうですね」岡本さんの我が意を得たりの破顔一笑、その笑顔も楽しみだけれど、きっとこのお題はゆくゆく必ず何らかのプラスになるとの予感、実際そのとおりになるアイテムがいくつもあり、私に振られたお題、海外と日本の携帯通信大手キャリアの料金比較などもそのひとつで、前政権で取りざたされるよりかなり以前に、岡本さんは国際的感覚で疑問の目を向けられていました。「この国に民主主義なんてあると思いますか？」これも岡本さんの口癖のひとつです。そうそう、岡本さん語録、というようなものもかなりあって、まとめたら名言カレンダーにできるんじゃないかと思うほど……。

2018 年頃から体調を崩され、主宰であったその勉強会にも出席ままならないこととなり、ぼっかりあいた空席に、もうそんな語録も集められないことをとても残念に思います。

岡本さんのおかげで私の得たものははかりしれません。いま、広いまっすぐな一本道を見失ったような気持ちです。

葬儀に参列し、ご遺族からすすめられてお柩にいらっしゃる岡本さんに対面させていただきました。迫力満点のあの笑顔に会えないのが不思議でした。

帰路、ふと車でどの道で帰ろうかと……でも、時間もないし……。

岡本さんのあの笑顔が浮かびました。関西訛りの優しい口調でした。

そうですね、そうしましょう……。

岡本さんにそう答え、静かに車を走らせました。私は、少し遠回りの道を選びました。
ご冥福をお祈りいたします。

(2021年11月29日原稿受理)

「岡本さんの追悼文」

篠崎 吉弘

宇都宮大学大学院国際学研究科に在籍していた岡本義輝さんが令和3年10月26日に亡くなられ、国際学研究科は全く縁遠い私が岡本さんの追悼文を書くことになった理由は、下記の様な繋がり、書くことになりました。

1. 岡本さんが主宰する岡本塾のメンバーの一人であること。
2. 国際学研究科同窓会誌「知求会ニュース」をまとめている土屋さんが岡本塾メンバーであること。

岡本義輝さんは、シャープを60才で定年退職、2004年4月に社会人大学院生になり、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター研究員として国際学部に籍を置いて、其の後博士号を取得されました。

私と岡本さんとの出会いは、10年位前は、宇都宮大学（以下、宇大）の国際学部が社会人大学院生を盛んに募集していた時期に、国際学部のいくつかの公開授業に一般市民が参加聴講でき、岡本さんが社会人大学院生の講師として話をされた時でした。

岡本さんは企業人として、シャープの経営側に上り詰め、最後は、シャープマレーシアの社長を務められました。会社を離れて、品質、納期、コストに追いかけることが出来ず、肩の荷がおろしたと言っていました。リーダーシップがあり、来るもの拒まず、対応してくれました。

岡本塾は、岡本さんが音頭を取り、集まって勉強会をしようということで、主宰者である岡本さんの名を借り、「岡本塾」と名をつけました。楽習塾と言った感じでしょうか、岡本さんが主宰、2011年から毎月1回の集まり、メンバーが輪番制で与えられたテーマについて、調べた事を、発表する集まりです。

現在、メンバーは7人です。メンバーは宇都宮大学の何らかの公開講座受講者で、色々な職種のサラリーマンの定年退職者で、現役の方が3名います。現在はコロナ禍で中断していますが、メンバーの中にコンピューターのプロがおり、その方が音頭を取ってくれて、ZOOMで近況報告会を隔月で継続、次回で108回になります。

岡本塾メンバーになった経緯は岡本さんが勧誘と言うものもありますが、各人各様です。岡本さんが、テーマを各人に投げ掛け、それについて調べて発表するというものでした。開催場所は、宇都宮駅西、現トナリエの1Fのタリーズコーヒーショップで、10時から12時迄でした。開催頻度は月1回、発表後、リッチモンドホテル1Fの「日本海庄や」にて昼食を取り解散でした。

また「岡本金曜便り」「日本の電気電子産業の発展を願って」というサブタイトルをつけ、日経ビジネスオンライン、日本経済新聞に目を通して、興味のある内容、ご自身の活動報告について、毎週金曜日に 290 人に配信していました。

このサブタイトルに上げた様に、企業で働き、また海外駐在の中で、日本の電気電子産業の凋落を感じ、危惧していた思いを岡本さんの口から何度も聞きました。

定年退職後にすぐに社会人大学院生になったこと、また「金曜だより」の配信、その為に学ぶことが好きで、前向きの姿勢で、好奇心を持ち続けた方だったと思っています。そしてパソコンも退職後に始めて、ホームページを作るまでになったと言っていました。企業で働いた経験から企業動向、産業動向に興味を持ち続けていたと感じています。

また、悪意のない、結構辛らつストレートなもの言い、人を引き付けていた様に感じます。ただ無類の酒好きのため、加齢により酒が弱くなり、宇都宮駅の階段を踏み外し、救急車で運ばれてから、体調不良につながり、数年前にウォーキング中に脳梗塞で倒れて、体調が悪くなり、施設に入所後 2021 年 10 月 26 日に亡くなりました。

月 1 回の勉強会も面白かったのですが、新年会。暑気払いという飲み会で、毎回宇大の教授の方々をゲストとしてお招きして、会食の時間の中で、違う世界を垣間見る話を聞くことができた機会はとても貴重でした。岡本さんの人柄だと思いますが、呼ばれたゲストの先生方も会食時には快く来て下さった様に感じています。

ゲストで来て頂いた方は、北島元副学長、国際学部の高際先生、友松先生、若山先生、松尾先生、吉田先生、作新学院大学の故日高先生（放送大学の関係）、他学部の大関先生、浅野先生、秋山先生ですが、特筆すべきは夏季集中講義で宇都宮大学に来学されていた、上智大学元学長の石澤良昭先生（アンコールワットの研究者として有名）を 2 回もゲストとして、呼び出して、お話を出来た事で、普通は考えられない様なことでした。

また日光の高井屋の女将と国際学部の社会人大学院生繋がり、江戸時代から日光の二社一寺御用達の高級割烹「高井屋」で皆さんと会食をしたこと、なかなか予約が取れない店の為、これはメンバー全員からは大好評でした。

岡本さんと出会った事で、単調になりがちな定年退職後の生活が、モノクロからカラーになり、人の輪が広がり、楽しい時間を過ごす事が出来たと感謝しています。テーマについて、自分なりにわからない事を宇大の図書館、市内の図書館で調べることで、またメンバーの発表した内容から全く知らなかった事を知り、質問、疑問等から、ワイワイガヤガヤと話をし、色々なキッカケ、刺激をもらえたこと、とても有難い事だと感謝しています。

もっと元気で長生きをして貰いたかったと、とても残念な思いです。知人の一人としてご冥福をお祈りしております。

(2021 年 11 月 29 日原稿受理)

研究室訪問 54 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

博士録 55 第 22 号から国際学部、国際学研究科に関係する同窓生に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

知究人 36 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

「国際法と平和構築を通して広がる世界—私の大学院生活の紹介—」

宇都宮大学大学院

地域創生科学研究科社会デザイン科学専攻

グローバル・エリアスタディーズプログラム 1 年

横山 友輝

皆様こんにちは、2021 年度から地域創生科学研究科社会デザイン科学専攻グローバル・エリアスタディーズプログラムにて研究活動を始めました横山友輝と申します。本稿では、私の自己紹介もかねて、大学院での活動と研究内容を皆さまにご紹介させていただければと思います。

私は宮城県仙台市出身で、国際的な仕事に挑戦したいという思いから、2017 年に宇都宮大学の国際学部に入學しました。そこで、現在ご指導いただいている藤井広重先生と出会い、国際法や国際平和構築について、学内外の様々な環境で学び、研究を行っています。

大学院で力を入れたことのひとつは、国際人道法への理解を深めることです。私は今年の 8 月に、研究室の仲間である福原玲於茄(地域創生科学研究科、社会デザイン科学専攻、グローバル・エリアスタディーズプログラム 1 年)・菊地翔(国際学部 3 年)と共に、「Kırımlı Dr. Aziz Bey 国際人道法大会」に参加しました。国際人道法とは、文民の保護などの紛争下で守られる事項を定めている条約です。本大会では、それらを運用して、攻撃の違法性などを、海外の学生と議論し、国際人道法の理解の正確さなどを競いました。よい緊張感の下で学びを深めるとともに、海外の学生とコミュニケーションをとる機会となりました。さらに本大会では、第 2 位を獲得することができたのも良い思い出となりました。

次に、私が修士課程で取り組んでいる研究内容を紹介させていただきます。私は学部時代から紛争後平和構築という分野に強い関心を持っています。「平和構築」は、非常に多くの分野を包括する言葉であり、私が取り組んでいる「警察構築」もそのうちの 1 つです。皆さんは、紛争後の国づくりにおいてどのような性質をもつ警察が求められていると思いますか？紛争という言葉から、多くの方が不安定な地域における「治安を維持するための

強力な警察」の必要性を想像するでしょう。そのような軍事的なアプローチもひとつの方法です。しかし現在注目を集めているのは、Community-Oriented Policing という非軍事的な、コミュニティ特有のニーズに広く対応する警察行為です。私は、紛争後の不安定な社会において、そのような警察行為のあり方が有する課題や、可能性について研究を行っています。

最後になりましたが、この度は、知求会への投稿という大変貴重な機会をいただけたこと、大変感謝しております。残り約 1 年の大学院生活が実りの多いものになるように、これからも日々精進してまいりますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。また、これからも寒い日が続きます。本稿を読んでもくださった皆様、お体に気をつけてお過ごしください。

【参考記事】

・「Kırımlı Dr. Aziz Bey 国際人道法大会」への出場とその結果を、池田宰宇都宮大学学長に報告する機会をいただきました。

〈トピックス | 宇都宮大学 (utsunomiya-u.ac.jp)〉

・「Kırımlı Dr. Aziz Bey 国際人道法大会」への出場とその感想に関する記事を、藤井先生の HP に掲載していただきました。（英文記事）

〈[Competition Report] Won Second Place!!: Kırımlı Dr. Aziz Bey International Humanitarian Law Compet (fujiih.com)〉

・「Kırımlı Dr. Aziz Bey 国際人道法大会」HP（英文 HP）

〈Aziz Bey IHL – Moot Court Summer School〉

（国際学部第 23 期生・国際学科第 01 期生）

（2021 年 12 月 8 日原稿受理）

海外だより 31 第 27 号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

海外留学今昔 32 第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

学生サロン 20 知求会ニュース第 41 号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

キャリア指南15 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2021年の師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)

「著者」になること

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

コーディネーター

鄭 安君

不思議な感覚です。自分の名前が本の表紙に印刷されていること。

今年の7月末に、その本が手元に届きました。初めての「単著本」です。正式な発売は8月中旬以降でしたが、出版社(明石書店)の編集担当にお願いして、刊行日を2021年8月8日にしてもらいました。8月8日は、私の出身の台湾では「父(パパ)の日」で、父にプレゼントしたかったのです。そして、博士後期課程の恩師、田巻松雄先生や有志の方々と半年間をかけて準備したとちぎ自主夜間中学が同じ日に開校式を迎えることになったので、思い出として本に記録したかったのです。

本のタイトルは『台湾の外国人介護労働者一雇用主・仲介業者・労働者による選択とその課題』で、内容は2018年度に提出した博士論文をベースに、新たなインタビューや直近の動向を組み入れ、改めて諸関係者の「選択」に焦点を当て加筆・修正したものです。インタビューした諸関係者が直面した課題にどのように選択をし、どのような結果を生み出したかを考察したわけですが、私自身もこの研究で様々な選択をしました。40代後半という年齢で博士後期課程に入った選択、台湾の介護分野で働く女性外国人を研究テーマとした選択、そして、「失踪者」へのインタビューで得た知見を本の中核的な考察内容とした選択。

「失踪者」とは、雇用主のところから逃げて、非正規滞在者となった外国人のことです。これらの外国人は「不法滞在者」「不法就労者」と見なされ、警察などに摘発される対象者となります。言うまでもなくそのアプローチは非常に難しい。外国人労働者に本格的なインタビュー調査を開始しようとした頃、田巻先生に「失踪者こそが外国人労働者受け入れ課題の中心的な部分で、失踪者へのインタビューが必要」と言われた時に、正直、頭が真っ白になりました。四半世紀以上日本で暮らしてきた私は、当時、頑張って仕事を調整しても、台湾に戻れるのはせいぜい年2回で長くても1ヵ月間しかいられません。限られた時間の中、どこでどうやって失踪者を探すかと途方に暮れました。

しかし、何故か「やるしかない」と思い、無謀とも言えるぐらい出会えた人たちに「失踪者にインタビューしたい」と声をかけました。そして、あるベトナム人失踪者の「何故

かあの時に見知らぬあなたに会いに行く勇気があったのか、本当に不思議です」という言葉のように、不思議と次々と失踪者や失踪経験者と出会えて、じっくり話を聞くことができました。

また、本の出版も挫折の中での選択の結果です。外国人介護労働者という研究テーマは、幸運にも日本が外国人介護労働者を本格的に受け入れようとした時期で、多くの人が関心を示してくださいました。学位を取得したあと、色んな方から出版したほうが良いとのアドバイスをいただき、日本学術振興会の研究成果公開促進費に挑む選択をしました。田巻先生、そして田巻先生の恩師である駒井洋先生のアドバイスや紹介のお陰で、出版社が見つかり、学位を取得した年に助成金申請を出しました。しかし、結果は「不採択」でした。出版社の方々がこの本を出版する意味が高いと言ってくださいましたが、昨今の厳しい出版事情で、助成金なしでの出版が難しい。別の出版助成を見つけて挑戦するか、内容を再検討して日本学術振興会の助成金を再挑戦するか、諦めるかとの3択が目の前に並んでいました。

どうしても諦めたくありませんでした。本の内容をできるかぎり多くの人に伝えたいですし、インタビューに応じてくださった多くの方に出版を待ち望んでいると言ってくださいました。悩んだ末、日本学術振興会に再挑戦するという選択をしました。しかし、どのような方向で内容を修正すべきか、より分かりやすいキーワードとは何かなど、何も分かっていませんでした。日々の仕事や生活に追われて、あつという間に新年度の申請期限に近づき、焦る気持ちだけが募りました。

そして、ここでまたある意味での不思議な体験をしました。まず、2回しか会っていない台湾のドキュメンタリー映画監督に突然声をかけられて、遠隔でありながら、その研究・ドキュメンタリー映画製作プロジェクトに加わりました。仲間たちが現地で実施したインタビュー調査、アンケート調査、撮影、シンポジウム、そして共同執筆した報告書などを通して、最新の動向を知り、新たな発見を得ました。そして、同じ時期に依頼された3本のコロナ禍関連の原稿執筆で、コロナ禍での雇用主・仲介業者・労働者の新たな選択をSNSインタビューで追いました。また、介護福祉専門の太田貞司先生との意見交換の中で、要介護者の「生活者」視点の大切さを痛感し、誰もがいつか直面する可能性のある介護について「私たちの選択」への問いが生まれました。

大学の科研担当者にも涙が出るほどの丁寧なサポートをいただき、最善を尽くしました。ただし、難しい挑戦であると分かっているため、「ダメ元での再挑戦」という気持ちで応募書類を提出しました。その半年後に体が震え上がるほど、驚きの「採択」のお知らせが来ました。そして、わずか4カ月後に「著者」になりました。採択から出版まであまりにも時間が短かったので、「出版の苦労話を書いてもらえないか」とこの原稿が依頼された時に、「苦労があったのか？」と考えました。

今でも自分の名前が本の表紙に印刷されていることに不思議に感じます。「著者である」というよりも、周りの人々の温かい支えと思いで「著者になった」私です。

(国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻 第10期修了生)

(2021年11月13日原稿受理)

東南アジア支部だより

第63号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん(国際学部社会学科第1期生・国際学研究科国際社会研究専攻第1期生)が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019年4月から、年4回から年2回発行(4月1日、9月1日)の変更になりました。

EU支部だより

第38号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会EU支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の40号の内容は、1. イタリア 各紙ニュースヘッドラインは、やはり Covid 2 EU支部だより 一義務化反対のデモです。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

- 訃報でお知らせした岡田三郎先生は編集者の恩師でした。先生は東京藝術大学出身で、ギリシャ美学の研究者でした。編集者が研究したいテーマに理解を示していただいたことが進学を決め手になっています。1995年に教養部から衣替えした国際学部で社会人入学試験に失敗し、4年間科目等履修生として学びたい科目を履修していました。研究科が新設された際には、岡田先生から直接電話で声をかけていただき、国際文化研究専攻に入学することになりました。同級生は13名中5名が社会人で、残り8名が学部出身者でした。設備はあまり整っておらず、手探りの中で研究科が発足した感じです。
- 岡田先生とは一時期までメールのやり取りができましたが、郷里の山口県に帰郷されてから音信が途絶えていました。ある時に佐々木一隆先生から山口の連絡先をお聞きして、年賀状を送付しました。しかしながら、返信はありませんでした。今回の訃報を知ったのは、奥様からのはがきによるものです。
- 「古文書読解検定3級」に無事合格しました。しかしながら、採点内容の結果はお恥ずかし限りでした。コツコツと古文書解読に精進せねばと思いました。

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。** chikyukai@freeml.com

宇都宮大学大学院国際学研究科同窓会